

謹賀新年

本年も何卒よろしく
お願い申し上げます。

二〇〇九年元旦

柔軟性・融通性に欠ける時代のせいだろうか、やれ肩凝りだ、やれ腰痛に関節痛だと嘆く人が周囲に増えつつある。そんな因果関係の一つもこじつけたくなるほどやり切れない世の中だ。

巷にお笑いブームが起ころうと、身の回りの出来事に笑える材料は少ない。事実事はフイクションより奇なり、現実にはコメディより不機嫌なり、異なる二つの根本原理から物事が成り立っていることを「二元」と言う。二元的に解釈も説明もできないこの時代。ならば、対立する二つの視点をワンセットにしてみれば、本質の何たるかが少しはわかるかもしれない。

指をくわえて無思考であり続けるよりはましだと思いきや、無謀かもしれない時代分析を試みる。

損得

（経営）人生や仕事だけの評価するのは情けない話。だが「損得抜きで事に処する。だけで必ず負け組に入る。なぜなら、「損得抜き」とは「損しても」と同義であり、「得」はすでに骨抜きされているからだ。

さらに、多少は「少」のみを意味し、勝敗も「勝」のニエアンスもチャアンスもない。そう、今やわれわれの選択肢は損・少・敗に絞られた。

有無

（宗教）「有るべきものが無くなっている」という経験は数え切れない（賞与、年金記録……）。ところが、「無い」と思っていたのが有る、というサブライズは手品の世界と残留農業だけで、望外の幸せに恵まれることはめつたにない。

「有無相通する」に倣って、有り余っている所から無い所に融通するしか手立はないのだが、はたして有り余り側にそんな奇特な人はいらぬのか。

方円

（幾何学）四角と丸のことである。「水は方円の器に従う」でおなじみだが、入れ物状況に応じて形（自分）を変えられ

るのは液体だけだろう。不器用な人間にとつて四角と円はまったく別の図形である。

丸い器に四角で順応（○）するか、四角い器に丸く順応（□）するか——いずれにしても、回り小さくなって従わねばならないのが辛い。

真偽

（哲学）食料自体は人間を欺かない。偽装はつねに人間の作業心である。火の用心・戸締り用心を加えて、「食用心」にも手を抜けなくなつた。

真と偽があつて、偽に気づく間はまだ救われる。やがて偽ばかりがはびこると、「おつ、珍しく真なるものに出会つたぞ」というようなことになる。真が偽に圧倒され真偽という用語が「虚偽」に吸収されないことを切に望む。

需給

（経済）需要と供給がゼロになった時点で関係が成立しなくなる。こうして消えていった商品や商店は星の数どころではない。

「買入人がいないから作らない、売れない」という説と、作らない、売れないから買えない」という説がある。商店街が「商店骸」になる経緯も似ている。人が来ないから店を閉

める、しかし店が閉まつているから人が来ない——これは永遠の二ワトリとタマゴではない。まずは供給しなければ関係など始まらないのだ。

上下

（社会）垂直的に見る上下や老若や勞使になり、水平的だと左右や男女や自他というイデオロギーになる。二つの物事や概念があればそこに差異が生じるのは当然前

差異が上下左右にとどまらず、優劣にまで及んでしまうから「格差を生むようになる。困つたものである。

内外

（国際）ある場所——それは外（ウチ）だ。ソトは異質、ウチは同質。外にある魑魅魍魎の世界に対抗できるほど二つの組織の結束は固そうには見えない。

「福は内、鬼は外」などと都合のよいエゴイストを演じていては、世界規模の津波に呑み込まれる。気をつけよう。

清濁

（化学）この二元に分別すると、善悪論になる。すなわち、清ければ君子かつ善人、濁つていれば小人かつ悪人という図式。しかし、澄

んだジュースを少し振れば、底の沈殿物が溶けて濁る。君子と小人、善人と悪人の見分けがつきにくい時代になった。「清濁をくわえ飲む」にも程がある。高い地位の人間ほど足元が滑りやすいという真理はどういふ生ききている。

伸縮

（整体術）社会も人間関係も伸びたり縮んだりできず、硬直化している。いつどこでそうなるたのかはわからない。

わたしたちは精神、言語、教育などの骨格をことごとく歪めてしまった。骨格の歪みやバランスの悪さが体調不良を招くといふ。行きつけの整体師はおつしやる。処方方の切り札は伸縮自在なマインドストレッチである。

縦横

（発想学）上下・縦と横だが、四開への広がりと自由闊達に振る舞うやわらかさを湛えている。

縦横は永続性と結びついて「縦横無尽」という熟語になる。発想や活動を自ら妨げない姿である。それでこそプロフェッショナルだ。よき時代と舞台を待望する前に、すべての相反する二元価値が己から発する二元を思い知る。